



# とつつかカア ひつつかカア

南部町諸木

絵：野口宣友

おかしおかし、あぬといひひい、  
誰だれにも好かれん心やもしこおじこ

さんがありました。

ある日おじこさんは隣町となりまちへ蓑みのや草履くつりを売りに出かけました。隣町から帰る頃には、すっかり辺りは薄暗うすくらくなり、ふくろうの声も聞こえてきます。「ひのタワ(塔)」は、きて（怖い）なあ、真ひ暗になつてきました」とつぶやきながら、おじいさんが山の中の一本道に入るとい、やがてびいからか低い声が響ひびきました。お渡るように聞いてもおじこさん

しゃべってました。

えりくず中なかが重たういなあと思つてゐると、迎えに出てきたおばあさんがびっくりした様子でおじいさんの背負つた籠かごを見ていました。おじいさんが籠を覗きこ込むと籠の一杯いつぱいに錢せんが入つてました。それを見ておじいさんとおばあさんは、「ああ、おじこさんや、これでいい正円まことにが迎えられえな、良かつたな」「うん、そげだな、よかつたな、おばあねえ」と喜び合いました。

声は、「と一つかか（取つ付つひうか）、ひ一つかか（取つ付つひうか）、ヒ一つかか、ひ一つかか」と言つていました。それを聞いて怖くなつたおじいさんは、足早に山を下りました。しかし、下りても下りても、声は後を追つように「ほー、ほー、と一つかか、ひ一つかか、ほー、ほー、ほー」と迫つてきます。

恐ろしくてたまらなくなつたおじいさんが、「取り付くなら取り付け！取つ付くなら取つ付け！」と叫ぶと、いつの間にか家に戻もどります。

その話を聞いた隣のおじこさんは、「よつしゃーおひやんひやん」と叫んで、銭せんをちらつて戻らんといけん」と、山へ行くいくとしました。隣のおじいさんは、がいな（大きな）籠かごを背中に負つて、夕方の早い内から深夜まで、山中を走り回つて、籠一杯に錢せんを儲けようと、おばあさんが止めるのも聞かず山へ出発しました。

隣のおじこさんは大喜びで山を下り、「ばあさん！ 篠籠しののめかごを覗いてみて！」と叫んで、庭に籠を下ろして見ると、なんと籠の中には松脂まつやが一杯に入つていました。その上、ねちやねちやとした松脂は籠のあじいさんの体中にこびりついていました。隣のおじいさんは、「うわあ、気持ち悪いー」と叫ぶと、また山の中から「ヒツカカー、ヒツカカー」と隣のおじいさんを嘲あざけるような声が、こつまでも聞こえていました。

おしまい

ほー、ヒツカカ、ヒツカカ」と趣おもが聞いてもました。隣のあじこさんは喜んで、「早いにこしたことはねえ！ 取り付け！ 早く！」と答えると、また同じ低い瓶で「ヒツカカ、ヒツカカ」と聞くので、「ヒツカカはひつか！」と答えたが、「卑くー卑くーヒツカカはひつか！」とつぶやかれて、「ヒツカカかんじやのつて、『とつかはとつかーへつかはへつかはとつかーへつかはへつかー』」と囁かすと、だんだんと背中が重くなつてました。